



■プロフィール

木原 活信 *Katsunobu Kihara*

福岡県出身、炭鉱の町筑豊で高校生まで育つ。その後、京都、広島、東京、カナダと転々とし、現在は京都市在住。NTT東海カウンセラー、広島女子大学講師、東京都立大学助教授、トロント大学ソーシャルワーク客員研究員を経て、現在、同志社大学社会学部教授。博士(社会福祉学)。専門領域は、福祉思想・哲学、ソーシャルワーク論。実践フィールドとして死生臨床(自殺予防)、精神保健福祉領域。日本キリスト教社会福祉学会会長。社会福祉法人京都基督教福祉会評議員、社会福祉法人イエス団評議員、京都市精神保健福祉審議会委員。主著に、『「弱さ」の向うにあるもの』(いのちのことば社、2015)、『社会福祉と人権』(ミネルヴァ書房2014)、『対人援助の福祉エトス』(ミネルヴァ書房2003)、『J.アダムズの社会福祉実践思想の研究』(川島書店1998)(第5回福武直賞受賞)。

3人の子供たちと妻の5人家族。趣味は、亀、クラシックギター、カープ。キリスト者。

サインが刻印されたギター

木原活信

良いギターとは、大量生産品ではなく、訓練されたプロの職人の手によって一つ一つ精魂込めて作られている手工品である。そのようなギターには、工房の名前と、製作者の名前が刻印されている。かつて手工品ギターにトラブルがあってその製作者にお尋ねしたことがあったが、「このギターは、ハカランダの一枚板で作られたので…」などと懇切丁寧に的確に指示をいただき、その性質を熟知したまるで我が子のように愛着表現が印象的だった。

手工品ギターは、量産品と何が違うのか。もちろん使われている木材も違うので音質も違うし、比べ物にならないほど高価でもある。そして、その製作工程において、職人が一つ一つ丁寧に手塩にかけて一つの作品として作っているかどうかが決定的に違う。ゆえに同じものは他になく、その証として作者がその作品にサインをする。

それほどの違いがあっても、よくみると外見は同じである。あるリサイクルショップで驚いたことがあった。何気なく中古のギターを眺めていたら、大量生産のギターに混じって、著名な製作者の手工品ギターが展示されていた。値段も他の量産品と同じで、破格の値段で売られている。どこも傷んでいない。専門店ならば、ガラスケースに鍵付きで展示されているはずのその品が、埃まみれで無造作に店頭販売されていたのである。すぐさま手に取り、破格の値段で、それを手に入れた。おそらく、誰かが値打ちも知らずにその店に持ってきて、店員もそのギターの値打ちを知らず、ガラクタ同然でその店で売買された結果、その価値ある手工品ギターが、安値でたたき売られたのであろう。

ところで、聖書は、私たち人間は一人一人が「神の作品」であり、「高価で尊い」「愛されている」と呼びかけている。神の手工品として、尊厳をもって「神の似姿」に創造され、特別の愛をもって個性的に造られている。故に、本来、個性があり、ユニークな存在であり、自分と同じ人間は一人もいない。その内には計り知れない宝を持っている。それにもかかわらず、自分の価値を知らずにあたかも大量生産のギターのように自分自身を過小評価してし

まっていないだろうか。周囲もそう見てしまう。ちょうど値打ちを知らない店員のように、本当の価値を知らずに扱ってしまう。手工品ギターには作者のサインがあるように、私たち一人一人にも神の刻印が押されている。しかしそれを知らないことが人生の根本問題である。その結果、自分を安く見積もり、社会もそう値踏みしてしまう。埃まみれで無造作に置かれてあったギターのように。

このことは最近話題になっている日本の若者の世界に類をみないほどの自尊感情の低さと無関係ではない。自尊感情が低いゆえに、逆に人の評価が気になり、他者の承認が欲しくてしょうがなくなる。しかしいくらそれを得ても決して満足することはない。あたかも嗜癪のように。しかし、神の「いいね!」の承認一つだけで十分なのである。これがあれば、もはや他人の承認は重要でない。

「主は私を見捨てた。主は私を忘れた」と自暴自棄になる現代人に対して、神は、「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、わたしが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。」(イザヤ49:14-16)と呼びかけている。私たちが弱く失敗しようと、いくじなしであろうと、神の愛は絶対であり変わらない。ありのままの存在そのものを愛されるのである。なぜなら神こそが私たちの作者あるし、一人一人はユニークで、世界に他に類似品がない特別な存在であり、その私たちにその刻印が押されているからである。

